

## 西洋、中国、日本のジフテリア史素描

その一 古代、中世

中村 昭

はじめに

ジフテリアはわが国では明治十三年の「伝染病予防規則<sup>(1)</sup>」の制定の際に六種の伝染病の中に入れられ、また現在も十種の法定伝染病の一つとされているので、重要な伝染病であることは間違いないが、最近先進国ではほとんど新らしい患者の発生が無くなったので、やや関心が薄れていることは否めない。また同じく急性伝染病であるペストやコレラが過去において惨禍をほしいままにしたために、その疫史の研究が盛んに行われたのに比して、ジフテリアの疫史の研究は割合少ない。

わが国の文献では、富士川の『日本疾病史<sup>(2)</sup>』にはジフテリアの項目はなく、同氏の『日本医学史<sup>(3)</sup>』の疾病史の項目の中で簡単に触れられているに過ぎない。山崎の『日本疫史及防疫史<sup>(4)</sup>』にはジフテリアの項目があるが、明治以後を主体とし、しかも防疫史の側面に重点を置いているので、疾病史の記述としては不完全である。

外国の文献では、ヘーゼルの『医学史及疫病史<sup>(5)</sup>』ではジフテリアという病名は使わず、Garratilloという名称で断片的にジフテリアに触れている。ヒルシュの大著『地理的及歴史的病理学<sup>(6)</sup>』にはジフテリアの項目があり、主として西洋の

ジフテリアの歴史を古代から十九世紀まで記述している。またジフテリアの血清療法を北里柴三郎とともに創始したベ  
ーリングが『ジフテリアの歴史』<sup>(7)</sup>というモノグラフを書いている。これは自分の血清療法の説明にも大分頁を費してい  
るが、ジフテリアの歴史としては十九世紀前半のフランスのブレトノーの業績を詳しく紹介し、これに最大の讃辞を呈  
しているのが特徴である。

ジフテリアが古代から存在していたことは疑い得ないことであるが、ジフテリアという言葉は近世まではなかった。  
ジフテリアという病名は十九世紀前半にブレトノーが作ったものである<sup>(8)</sup>。だからこの病名が一般化し固定化するまでは  
様々な呼び方をされている。最も問題になったのは咽頭ジフテリアと喉頭ジフテリア(クループ)が同じ疾患であるか否  
かということである。ブレトノーはこの両者は同じ疾患であると断定して、ジフテリアという病名を創出したのである  
が、すぐにそれに従わない人も多く、この問題が本当に解決を見るのは結局ジフテリア菌の発見まで待たねばならな  
かった。

本稿は西洋、中国及び日本の文献をできるだけ探り、ジフテリアの疾病史を素描して、今までの知見にいくらか補充  
をしようとするものである。時代は古代から十九世紀まで、すなわち大体ジフテリア菌が発見されるまでとする。便宜  
上古代、中世、近世、近代に区分して記述し、今回は古代、中世の分を掲載する。古代、中世では相対的に中国の文献  
の比重が大きくなった。中国の古医書は疾病史の宝庫である。

## 一 古 代

### (一) 古代ギリシャ時代

古代におけるジフテリアの確かな記載は紀元後二―三世紀のカップパドキア(小アジア)のアレタイオスが最初であると  
述べる著者が多いが、『ヒポクラテス全集』をよく読んで見ると、かなりジフテリアらしい記述を見出すことができる。

この文章のすべてがヒポクラテスの著作ではないが、大むね紀元前四世紀頃の内容とされる。次に引用する二例などはジフテリアと考えてもよいのではないだろうか。

ポレマルコス夫人が冬アンギーナに罹り、咽喉の下部に腫脹が起り又劇しき熱が起った。刺絡によつて咽喉病の為に起る窒息発作が終つた。然し熱は続いた。患者は恰も海から上つた潜水夫の様な呼吸をし、胸からは所謂腹話術者の様な音を發した。第八、九日の夜に下痢を起した。排泄物は多量で悪臭あるものであつた。其後発声困難を起して終に患者は死んだ。<sup>(9)</sup>

この記述は近代の医学書のジフテリアの症状の記述とほとんど一致するものである。喉頭ジフテリアでは窒息発作を何度か起こし、それから回復する者もあつたが、多くは死亡したのである。次の症例はさらに詳しい症状と治療法の記述がある。

アンギーナ。患者は所謂アンギーナの為に窒息発作を起すものである。病気が専ら咽喉にあるが如く見え、唾液その他のものの嚥下不能となり、両方の眼が痛み、絞殺死体の如く突出して凝視し、又眼を動かすことができなくなる。吃音を起し、頻回跳び上り、顔面及び咽喉部に灼熱を感じる。一見何も無い様に見えるが、視力聴力共に弱り、窒息発作の結果話すことも聴くことも、亦歩行することも不能となり、口を開き流涎を起し横はつてゐる。斯かる状態で患者は五日目、七日目又は八日目に死ぬ。併し之等の徴候の何らかが休止するならば、その病が軽症なることを示し、これを准アンギーナと云ふ。斯様な人には乳房以下で刺絡を施す。又下腹を下剤或は浣腸に依つて清掃するの要がある。顎に沿ふてはカニューレを挿入して空気を肺臓に送り得る様になし、出来得るだけ速に咯出せしめて肺臓を小さくなし、硫黄及びアスファルトを以て燻蒸する。之には管を以て鼻孔を通して吸はせ、そして粘

液を排泄するのである。咽喉及舌には粘液を排泄するところの薬を塗布し、而して舌の下にある血管を瀉血し、肘部も亦瀉血するが、之は患者の力の強い場合に限る。<sup>(10)</sup>

ここに書かれている様に、絞殺される如き症状を呈するのが喉頭ジフテリアの特徴であった。治療は瀉血と流腸が常套手段であつたが、さらに咽喉の局所に工夫して薬を塗布した。なおそのほかにここに注目すべき記述がある。それはカニューレで肺に空気を送ることである。これは気管切開をしてカニューレを挿入したものと思われる。近代においてもジフテリアで窒息症状が現れると、成功率は低かつたが起死回生の手段として気管切開が行われた。ヒルシュ<sup>(11)</sup>によれば、気管切開の最も古い記録は紀元前一世紀頃ローマで活躍したギリシャ系の医師のアスクレピアデスによるものとのことであるが、この『ヒポクラテス全集』の記載の方が古く、アスクレピアデスは古くからギリシャで行われていたこの手技をローマで行つたのであろう。

プレートノー<sup>(12)</sup>によれば、ジフテリアはヒポクラテスよりもさらに古く、ホメロスに近い時代にエジプトからギリシャに入つて来て、その為にギリシャではエジプト病と呼ばれたという。

## (二) 古代ローマ時代

古代ローマでは、この病氣は紀元前三世紀の第二ポエニ戦役（ハンニバル戦争）の時にローマ軍がアフリカから持ち帰つて来たと思われていたといふ。<sup>(13)</sup>

次に時代は下るが、古代ローマの植民地となつた小アジアで紀元後二―三世紀に活躍したギリシャ人系の医師のアレタイオスがこの病氣について詳しい記述を残している。彼によればこの病氣はエジプトやシリアが氣候的条件によつて多く、その為にエジプト潰瘍またはシリア潰瘍（咽喉の潰瘍である）と呼ばれたという。アレタイオスのこの病氣に関する

る記述を次に引用する。

扁桃周囲の潰瘍について<sup>(14)</sup>

扁桃に生じる潰瘍のあるものは通常の性質のものであり、軽症で無害である。しかし他の通常でないものは悪疫の性質を持ち、致命的となる。きれいで小さく、表面的で炎症がなく、痛みがないものは軽症である。しかし堅くて凹みがあり、臭く、白い黒いまたは青黒い凝固物に覆われているものは悪疫性のものである。そしてもし病変が口腔の方へ拡がり、口蓋垂に達してそれを裂いたり、あるいは舌や歯肉や歯槽に達すれば、歯もゆるみ黒くなる。そして炎症は頸部を侵す。かくしてこれらの患者は炎症と熱と悪臭と食物の欠乏により数日以内に死亡する。しかしもし病気が気管を通って胸部に拡がれば一日以内に窒息によって死亡することがある。

まことに正確な記述である。初めに悪性ジフテリアと他の咽頭炎とを区別しながら述べ、最後にそれが喉頭から気管に拡がる場合のことを述べている。喉頭ジフテリアになれば、実際に一―二日で死亡することは珍らしくなかったのである。

次にアレタイオスがこの病気の治療について記述した部分を引用する。瀉血と洗腸が主体で、ヒポクラテスの時代とあまり変りがない。しかし実はそれ所ではなく、瀉血と洗腸はこの後も十九世紀前半まで多くの疾患に盛んに行われたのである。

口蓋垂周辺疾患の治療<sup>(15)</sup>

口蓋垂周辺の疾患のあるものは切開により治療しなければならぬ。これらのものは急性疾患として治療する必要がある。何故なら彼等のあるものは窒息と呼吸困難によって速かに死に至るからである。もし患者が若ければ我々は肘静脈を切開し、通常よりも多量に瀉血しなければならぬ。何故なら、それによっていわば絞首による窒息か

ら救うことができるのである。そしてまた初めはゆるい浣腸を、後にはきびしい浣腸をくり返し行う必要がある。しかしもし窒息がさし迫っていれば、後頭部と胸部に乱切を加えてカッピングを施さねばならない。

カッピングとは血液を吸引してそこに集めて、瀉血と同じ効果を狙うものである。

### (三) 古代中国、戦国秦漢時代

中国の医書で最高の古典は『黄帝内経』である。黄帝は伝説上の人物であるが、現在の『内経』は『素問』と『靈枢』に分かれ、それぞれ成立を異にし、いずれも戦国時代から前漢の間にでき上ったものと考えられている。このうち『素問』には喉痺という病名、『靈枢』には喉痺、猛疽、天疽という病名が現れており、これらは大体ジフテリアのことと考えられる。

富士川は『日本医学史』<sup>(16)</sup>の疾病史の一項にジフテリアをあげ、次のように述べている。

中古以前ニアリテハ、コノ症ハ急喉痺・喘病・猛疽等ノ名称ノ下ニ、他ノ咽喉諸病ト混淆セラレタリ。而カモ咽喉ニ義膜ヲ生ジ、急速ニ呼吸困難ヲ起シ、ソノ症險悪ナル病ノ殊ニ小兒ニ多ク発スルコトハ素問・靈枢以来、既ニ医家ノ知悉スルトコロタルヤ明カナリ。

まず喉痺についても少し考えて見る。痺とは塞がるという意味であるとする注釈家が多く、喉痺にジフテリアが含まれていたことは確かであろうが、『素問』から喉痺の用例をいくつか抽出して見ると、まず「第七篇陰陽別論」に「一陰一陽結す、これを喉痺と謂う」とあり、「第三十八篇咳論」には「喉中介介、梗状の如し、甚だしければ則ち咽喉腫れ喉痺す」とあり、さらに「第七十四篇至真大要論」<sup>(19)</sup>には「呕逆し喉痺し、頭痛し噎腫る」などとある。

そして「第四十三篇痺論」<sup>(20)</sup>では『素問』自身が痺の解説をし「所謂痺は各々其の時、風寒湿の氣に重く感ずるを以て

也」と述べている。また明代の注釈家の呉崐<sup>(23)</sup>は「痺とは気が流れ行かずして凝結することである」と述べている。

わが国の江戸時代後期の考証派の医家である多紀元簡の『素問識<sup>(22)</sup>』ではこの「第四十三痺論篇」で多くの注釈家の意見を紹介し、痺には四義あり、その一つは閉塞の義であり、喉痺の場合はそれであるとしている。しかしそのように一義的に当てはめることはどうであろうか。

これらを総合して考えれば、痺とは各々の器官の気の流通が結して、本来の機能をしなくなった状態と見てよいのではないか。故に喉痺というのも咽喉の働きが失われ、その中には閉塞する場合もあるということであろう。

次に『靈枢』でも「第十経脈篇<sup>(23)</sup>」などに喉痺という言葉は出て来るが、ここでは「第八十一癰疽篇<sup>(24)</sup>」の中の猛疽と天疽の部分を用用する。

岐伯曰く、癰の噓中に発する、名づけて猛疽と曰う、猛疽治せざれば化して膿と為る、膿寫せざれば咽を塞ぎ、半日に死す。其の化して膿と為る者は寫して則ち豕膏を合し、冷食せしむ。三日已<sup>す</sup>に頸に発する。名づけて天疽と曰う、其の癰大にして以て赤黒し、急ぎ治せざれば則ち熱淵液に下り入り、前は任脈を傷り、内は肝肺を薰じ、肝肺を薰すること十余日にして死す。

ここで「寫」という字は瀉血の瀉と同じで、この場合は排膿させることである。切開排膿した後には軟膏をつけ、冷たい食事をさせるとのことまで言っている。「膿寫せざれば咽を塞ぎ半日に死す」というのは氣道を閉塞することを言っているのだろうが、この部位を噓とも咽とも書いて少し混乱している。これについて多紀元簡は『靈枢識<sup>(23)</sup>』で次のように考察している。

簡案するに、説文に噓は咽也という、これ噓を食道と為す、然るに本文言う、噓を塞げば半日にて死すと、則ち噓は氣道たるや明らかなり。王氏準繩云う、結喉癰、一名喉癰、靈枢名づけて猛疽と曰う、其の勢毒猛烈畏るべきを

以てなり。簡案するに、天疽は両耳後左右頸上に発す。志云う、頸乃ち手足少陽陽明、血道循行の分部是なり、蓋し其の毒烈しく、人をして横天せしむ、故に天疽と名づくる也。

これを見ると猛疽が喉頭ジフテリアで、天疽が咽頭ジフテリアに相当すると思われる。「天」は幼くして死ぬことである。元簡は「天疽は両耳後左右頸上に発す」と述べているが、これは悪性の咽頭ジフテリアの場合、顎下や頸部のリンパ節が著明に腫脹することをいっているのである。

次に後漢の張仲景の『傷寒論』<sup>(26)</sup>を取り上げる。この書はまた『傷寒雜病論』ともいわれる。しかし、この雜病部分は失われたとか、また『金匱要略』がそれであるとかいう意見が行われている。しかし、私は『傷寒論』は「傷寒」のことだけを論じたのではなく、その他の感染症(雜病)のことも同時に論じたのだという、清の柯琴<sup>(27)</sup>の見解に従う。この書は「傷寒」のことだけを論じたのではなく、また抽象的な熱病の総論でもなく、熱病の各論を三陰三陽という枠で整理して述べながら、熱病論になっているという考えである。しかし今ここでその議論に立ち入るつもりはなく、ただこの中にジフテリアのことが述べられている可能性があることを指摘するだけとする。

まず『傷寒論』の「弁厥陰病脈証并治」の中の次の二つの文章はジフテリアについて述べている可能性があると考える。

傷寒先ず厥し、後発熱、下利必ず自ら止り、而して反って汗出、咽中痛む者は、其の喉を痺と為す。

傷寒六七日、大いに下せし後、寸脈沈にして遲、手足厥逆し、下部に脈至らず、喉咽利せず、膿血を吐き、泄利自ら止らざる者は難治と為す。麻黄升麻湯之を主る。

喉が痺すというのは前にも述べたように、機能障害というような意味である。従って後の「喉咽利せず」と同じようなことである。厥とか厥逆というのは体温が急激に下ることであるが、この場合は気道の閉塞によってそうなったと考



えられる。

次に「弁少陰病脈証并治」<sup>(29)</sup>の中でジフテリアと関連があると思われる文章を三つあげる。

少陰病、下利し、咽痛み、胸滿ち、心煩するは、猪膚湯之を主る。

少陰病二三日、咽痛む者は甘草湯を与うべし。差えざれば桔梗湯を与う。

少陰病、咽中傷み、瘡を生じ、語言する能わず、声出ざる者は、苦酒湯之を主る。

経絡説による解釈では、少陰経は咽喉に絡んでいるからだという。それは別として「咽中瘡を生じ」とはジフテリアの偽膜の可能性がある。よく知られているようにジフテリアは咽喉部や口腔粘膜にまで厚い偽膜を生ずるのが特徴であるが、ここに述べられている「瘡を生じ」というのも単なる扁桃腺炎や舌苔とは思われない。

また「胸滿ち、心煩する」は空氣の不足で心肺が苦しい様子と思われる。そして氣道の狭窄が極度になれば窒息死するのであるが、次の文章はその死証を述べていると考えられる。

少陰病、吐き利し、躁煩し、四逆する者は死す。

少陰病、下利止り、頭眩し、時々自ら冒する者は死す。

少陰病、息高き者は死す。

躁煩というのは、ジフテリアで呼吸が苦しくなるとじつとしていられないのであるが、それに似ている。四逆とは四肢の厥冷である。頭眩や自冒は窒息による腦の低酸素症状とも考えられる。傷寒の太陽病や陽明病などでは死証の記述があまりなく、少陰病で死証の記述が多いのは、過去のジフテリアの死亡率の高さを考えれば当然ともいえる。

しかし、もちろんこれで断定できるのではなく、「傷寒論」の少陰病にはジフテリアが含まれている可能性を指摘し、後考を待つのである。

大体紀元後六世紀から十五世紀までを中世とする。

(一) 中世ヨーロッパ

西洋の中世の文献の原典は入手が困難であるが、ヒルシュ(30)の著述のジフテリアの項から引用して大体のことを記しておく。

中世のアラビアや西欧の医師の著作では、悪性型の咽喉頭炎(アンギーナ)にしばしば言及されており、これらは時には致命的であった。これらの中には当然ジフテリアが含まれている可能性があるが、他のペスト、チフス、天然痘などの随伴症状としての咽喉頭炎もあつたと思われる。

これに対して、中世ヨーロッパの年代記作者はもう少しはっきりした記録を残しているものもある。例えば、パロニウスは西暦八五六年に、ローマにおいて咽喉を閉塞して人を死に至らしめる悪疫が流行したことを記している。また一〇〇四年には咽喉に炎症(カタル)が下つて氣道を塞ぎ、人を無残に死なせる病の流行が記録されている。これらはジフテリアと考えて間違いないであろう。

さらにケドレヌスは、一〇三九年にビザンチン帝国のいくつかの地方で *κωδύλη* という流行病があり、死亡率が高かつたことを記録している。*κωδύλη* はギリシャ語で、ラテン語のアンギーナに相当し、咽喉頭炎のことである。先の『ヒポクラテス全集』の訳ではアンギーナという訳語が使われているが、ギリシャでは *κωδύλη* といわれているのである。ビザンチン帝国では中世までギリシャ語が使われていた。

また、一三八九年にはイギリスである種のアンギーナが流行し、多くの子供が死んだという記録がある。これもおそ

らくジフテリアだったのだろう。主として子供が死ぬということは、大人には既に免疫があることを意味し、こういう所はその伝染病の弥漫地帯なのである。なお、ジフテリアは世界のどこでも近代に至るまで主として子供の病気であった。

## (二) 隋唐時代及び平安時代

中国の文献では、先に述べたように古代からジフテリアと思われる記載があるが、中世においてもおそらく確実なジフテリアの記述が多数認められる。また中国医学を導入した日本でもその記録が認められる。

まず隋では『諸病源候論』というユニークな医書があり、その傷寒病篇には「傷寒咽喉痛候<sup>(31)</sup>」という項目があり、小児病篇には「喉痺候<sup>(32)</sup>」と「馬痺候<sup>(33)</sup>」があり、いずれもジフテリアに相当すると思われる。次に引用する。

### 傷寒咽喉痛候

傷寒病、経を過ぎて愈えず、脉反つて沈遅、手足厥逆する者は、此れ下部に脉至らず、陰陽隔絶し、邪少陰の絡に客り、毒気上に薰じ、故に咽喉利せず、或は痛みて瘡を生ず。

### 喉痺候

喉痺、是れ風毒の気、咽喉の間に客り、気血と相搏ち、而して腫を結して塞ぎ、飲粥下らず、乃ち膿血を成す。若し毒心に入れば、心即ち煩悶懊懐し、堪え忍ぶべからず、此くの如き者は死す。

### 馬痺候

馬痺、喉痺と相似る。亦是れ風熱毒気、咽喉頰頰の間に客り、血気と相搏ち、腫を結聚し痛む。其の状、頰下より腫れ、頰下に連り、喉内の腫れに応じて痛み塞ぎ、水漿下らず、甚しきは膿潰す。毒若し心を攻めれば、則ち心煩

懊悶し、死を致す。

この三種の文章は少しずつ観点が違うが、実体は同じことを言っていると思われる。「傷寒咽喉痛候」はもちろん『傷寒論』の影響を受けている。「喉痺候」「馬痺候」はさらに具体的な記述となり、「馬痺候」では顎下と頰部が腫脹することを強調している。「若し毒心に入れば云々」というのは、近代医学が教えるようにジフテリア菌の毒素が心筋を侵すことをいっているのではないかと思う。古人の慧眼に驚かざるを得ない。

次に随に続く初唐の時代に孫思邈ぼくが『千金方』という大著を書いた。これはそれまでに知られた処方せうの集大成という性質の著作であり、疾病の説明も簡単についている。ジフテリアと関係のあるのは巻六の喉病（34）の項であるが、様々な所から引用した処方集なので使用されている病名または症候名は一定していない。その中で次のようなものはジフテリアを表わしているのではないかと思う。

卒かに喉痺し語るを得ず

喉嚨腫れ塞がり神氣通ぜず

喉腫れ胸脇支さり満つ

喉腫れ痛み風毒心胸を衝く

懸癰咽熱し暴かに腫れ長し

懸癰咽中息肉を生じ舌腫る

喉痺深く腫れ頰に連なり氣を吐くしばしば数なる者馬喉痺と名づく

喉頭ジフテリアでは呼吸困難とともに発声不能になるが、それを語るを得ずといっているのである。また悪性の咽頭ジフテリアでは懸壅垂（口蓋垂）が著明に腫脹するので、それが懸癰けんゆうという病名にもなった。またここでは喉痺の重症（奔

馬型)のものを馬喉痺といっている。

さてこれまでに述べたように、中国には古くからジフテリアが存在したと考えて間違いがないと思われるが、わが国ではどうであったか。わが国と中国大陸とは古くから交流があり、痘瘡は飛鳥奈良時代において伝わって来たことは確実なので、他の伝染病も伝わったと考えるのが自然であるが、残念ながら中国のように古くから確かな記録がないのはつきりしない。

わが国では飛鳥奈良時代以来隋唐文化の摂取に努め、医学の領域では平安時代中期、永観二年(九八四年)に丹波康頼が隋唐医学の集大成というべき『医心方』を撰述した。『医心方』の巻五には、第七十治喉痺方、第七十一治馬痺方(36)という項はあるが、これは『病源候論』『千金方』『葛氏方』等の引用であって、これを以て当時の日本にこの病気が存在した証拠とするわけにはいかない。

しかし康頼は『医心方』の撰述に当って、わが国における応用を配慮して文献や疾患を選んだと考えられるので、こういう項目があることはこの病気が日本にあった一つの傍証となるかも知れない。

### (三) 宋時代及び鎌倉時代

中国では唐が滅びて五代、宋となるが、北宋の『和剂局方』(37)には喉痺並びに喉閉塞という項目で、この病気の為の処方はいくつか見られる。これはわが国の鎌倉時代の梶原性全の『万安方』にも引用されているので、まずそのうち「如聖湯」の説明を『万安方』(38)の和訓によって間接的に引用して見る。

風熱毒氣上リ、咽喉ヲ攻メ、咽痛ミ、喉痺レ腫レ塞ガリ、妨悶シ、及ビ肺壅、欬嗽咯痰、胸滿チ、振寒シ、咽乾イテ渴セズ、時ニ濁沫ヲ出シ、氣息腥臭ク、久々ト膿ヲ吐ク状、米粥ノ如キヲ治ス。又傷寒ノ咽痛ムヲ治ス。

桔梗二両、甘草二両、炙<sup>ア</sup>レ

この「如聖湯」は先に『傷寒論』の少陰病の所で引用した桔梗湯と同じで名前を変えただけである。だからこの説明で「又傷寒ノ咽痛ムヲ治ス」と書いているのも当然である。ただし「傷寒」という言葉はその概念がかなりあいまいで、一般の熱病という意味で使うことが多い。

また性全は和文の医書『頓医抄』<sup>(39)</sup>でもこの「如聖湯」を紹介し、そのコメントとして「此ノ薬キワメテシルシアリ、ヨノツネニアマネクコレヲ用ウナリ」と書いている。

次に同じく『和剂局方』の「吹喉散」の項を『万安方』<sup>(40)</sup>の訓によって間接引用する。

三焦大熱、口舌瘡ヲ生ジ、咽喉腫レ塞ガリ、神思昏悶スルヲ治シ、喉痺並ビニ能ク之ヲ治ス。

麻黄二両、芒消八両、青黛一両半（中略）

喉中腫痛シ、咽中塞ガリ、氣ヲ通ゼザレバ、筆管ヲ以テ薬半錢ヲ入レ、カヲ用イテ喉中ニ吹き入レヨ、立ドコロニ効アラザルハナシ。

神思昏悶とは窒息によって意識も絶え絶えの様子を表わしている。咽喉の中に管で薬を吹き入れるのも面白い方法である。

次に南宋の『三因方』<sup>(41)</sup>の「解毒雄黄円」の項を『頓医抄』<sup>(42)</sup>の和訳によって間接引用する。南宋の頃になると「纏喉風」という新しい病名が出て来る。

纏喉風トテ、ノントヲナワニテクビルヨウニオボエテツマリイタミ、及ニワカニノントハレテオレフシテ声ウセテモノ云ウコトアワザルヲ治ス。牙クイツメ、人ヲ見ルコトアワズ、ヒトエニ中風ノ如ク、或ハムネ塞リ熱シ、

ノント痰フサガリハレイタムヲ治ス。コノ薬タトイ死シタリトモムネアタタカナラバ、口ニオシ入レテアタウベシ、スリテ水ニテモアタエヨ、薬ノントニ下レバ必ズヨミガエル也。

喉頭ジフテリアの窒息症状をよく表現している。これを読むと性全の自分の文章のように見えるが原文と対照すれば翻訳であることがわかる。ただし「ナワニテクビルヨウニオボエテ」という所だけは補訳である。

喉痺の類の病名がこのようにいろいろあることについて、性全は『万安方』の中で次のように述べている。

凡ソ喉痺亦馬喉痺ト云ウコト有リ、亦纏喉風ト云ウコト有リ、亦咽喉壅塞、痺痛水食不通ナド、種類不同有リト雖モ、治方大概惟同ジ。

性全は『頓医抄』でも『万安方』でも自験例や他の日本人の症例については全く述べていないのであるが、今までに示した書きぶりを見ると実際はこの病気を診ていたように思われるのである。

次に鎌倉時代前期の藤原定家の日記『明月記』にジフテリアらしい症状の記載があることを紹介する。定家は梶原性全よりも古い人である。『明月記』はもちろん医書ではないが、実際に見聞したことを記したものであるから、資料的価値はかえって高いとも言える。しかも、喉頭ジフテリアらしいものと咽喉ジフテリアらしいものと二箇所ある。

『明月記』は変則的な和様漢文で書かれているが、これを書き下し文とし、振り仮名をつけ、少しの注を（ ）内につける。割注で入っているのは原注である。

寛喜二年（一二三〇年）十二月廿日

午時許、ばかり覚寛法印書状弟子小僧の手跡、十四日より喉腫、十六日より飲食通らず、又度々絶え入る。已すでに五ケ日、時を待つ如し云々、甚だ不便。

同十二月廿一日

忠康を以て使となし覚法印の疾を問う、帰り来りて云う、日来時を待つ如し、夜前より聊宜しきに似る云々。  
右大臣殿女房昨朝又絶え入らせ給う、殿下、大相、幕下、各馳け走り給う、又為す無し。

同十二月廿二日

宗弘を以て覚法印を問う、帰り来たり云う、十七八日の間六度絶え入る、水を飲む能わず、十九日夕膿血頗る出でし後聊か是非を弁ず、今度は若しくは存命か、親成始めより療治す云々<sup>(4)</sup>。

親成という医師が診ていたので、「喉腫」という病名はこの医師の診立てかも知れない。それは別として、ここで注目すべき記述は「度々絶え入る」ということである。喉頭ジフテリアは窒息発作によつて度々文字通り気絶するものである。そして「時を待つ如し」というのは臨終の時を待っているという意味である。しかしこの覚寛法印は六度気絶した後、咽喉から膿血が多量に出て症状が改善して助かったのである。

なお同じ時に右大臣の女房という人も何度か気絶して近親者が周章狼狽しているの、おそらく同じ病気だったのでろう。

次に同じく『明月記』から、咽喉ジフテリアの流行と思われる記事を引用する。こちらは著明な呼吸困難はなく、発熱と顔面頸部の腫脹が主な症状である。ここでは定家の子息の為家(宰相)を中心とした記述であるが、その他にも多勢の人が罹患していることがわかる。

安貞元年(一二二七年)七月十三日

昏に臨み、宰相昨日より所悩頸腫の由伝え聞く、母儀<sup>いそ</sup>忿ぎ到り、即ち帰り云う、昨朝心神違例の上顔腫る、仍ち早く退出の後、腫れ漸く増す、但し近日人多く此の病有り云々。



同七月十七日

宰相昨日より殊に増氣(悪化)の由聞き驚く、昏に臨み行き向く、疾の体甚だ重し、面腫に於ては漸々減氣(改善)、温氣(体熱)又瘖むるの後、昨日より更に辛苦発す、曹侍等云う、振鈴(口蓋垂?)大に腫る。近日諸人此の事有り云々。食事又受けず、氣色太だ弱る。

同七月十九日

宰相今朝温氣瘖む、心神昨日に似ざるの由、女房返事有り云々。

同七月廿九日

未時許、宰相来る憔悴甚だ不便。

同八月二日

女房頸腫温氣瘖めたり云々、三郎(定家の三男)の嬰兒又頸に熱氣有り云々、宰相力無く尪弱、不便。

これで見ると相当の流行である。定家のような年寄りはおも免疫があつたのかも知れない。「振鈴」という言葉はまだ確認し得てないが、口蓋垂のことと思われる。軽症の咽頭ジフテリアでは扁桃腺のみの炎症であるが、重症になると鼻腔と口腔全体に拡がり、口蓋垂は大いに腫れるのである。これはアレタイオスも述べていた通りであるが、漢医学ではこれを懸癭(癭)とも呼んだことは前に述べた。そしてこの場合、顔面と頸部のリンパ節と皮下組織が著明に腫脹するのが特徴である。病変が喉頭にまで及べば致命率が高くなるが、そうでなくても全身衰弱が著明である。

ジフテリアのこの型についてはまた次の項で触れる。

#### (五) 金元時代

南宋の時代は北方に金国があつたが、やがて蒙古は金と南宋を滅ぼし、中国を統一して元と号した。金元の時代には

中国医学の独特の発展があつたが、その影響はわが国にはすぐには及ばなかつた。それについてはここでは触れない。ここで取り上げたいのは、この時代に頸部顔面の腫脹に咽喉の閉塞症状を伴う疾病に対して、天行大頭病とか時疫疙瘩という新しい病名が出現して来たことである。しかしこれは必ずしも新しい疾病ではなく、やはりこれはジフテリアの一つの型と考えられる。

金の李東垣の『東垣試効方（羅天益編）』巻九の雜方門に「時毒治驗<sup>(46)</sup>」として次のような文がある。

泰和二年（一一〇二年）先師以て監濟源税を進納する時、四月民多く疫癘す、初め増寒体重きを覚え、次いで頭面に伝わり、腫れ盛んに、目開く能わず、上に喘し、咽喉は利せず、舌乾き躁き、俗に大頭天行と云う。親戚相訪問せず、如<sup>も</sup>之に染まれば多く救われず（中略）終に能く愈ゆることなく、漸く危篤に至る。

李東垣はこれに対して「普濟消毒飲子」という処方を作成して多くの患者を救つたのである。なおここで注目すべき記述は「之に染まれば」といって、この病気の伝染性に触れていることである。また東垣の処方名にも「消毒」という字が入っているが、毒というのも伝染という前提があると思われる。

東垣の門人の羅天益は元代に活躍した人であるが、彼の『衛生宝鑑』の巻九、頭面諸病の中の「時毒疙瘩<sup>(47)</sup>」の漏戸湯の説明で次のようなことを述べているのは、やはり同じ疾病と考える。

臟腑積熱し、発して腫毒と為る、時疫疙瘩、顔面洪腫し、咽喉<sup>と</sup>堵<sup>と</sup>じ塞がり、水薬下らざるを治す。

同じ『衛生宝鑑』巻十一の咽喉口齒門にもジフテリアと思われる症状の記載がある。例えば龍鬚聚聖丹の説明<sup>(48)</sup>の次の文である。

心脾客熱、毒氣攻衝し、咽喉赤く腫れ疼痛し、或は喉痺と成り、或は結硬消えず、愈えて復発し、経久瘥<sup>い</sup>えざるを

治す。或は舌本腫脹し、満口瘡を生じ、飲食嚙み難きは、並びに皆之を服す。

なお『衛生宝鑑』巻三には、ジフテリアとは別に、時気伝染という小論<sup>(49)</sup>もあり、興味をそえられる。天行病、時気、時疫などは流行病という意味であるが、既に伝染病という意味も出て来ているのである。

疙瘩の意味は不明であるが、おそらく頭頸部が大きくなることを言っているのであろう。これは今までに述べたように古くから中国医学で気がついていただけでなく、近代の西洋医学においても、咽頭の悪性ジフテリアの場合は著明に頸部と顔面が膨れることが認められており、その外観から Billbeck (牛の首) という別名もあるといわれる<sup>(13)</sup>。

次に引用する元の『施円端効方<sup>(50)</sup>』ではこの病気を新らしい病気と考えているが、その中で「頭面牛の如し」と言っているのは、西洋の観方と偶然に一致するものである。

時疫疙瘩腫毒は古方書論その説を見ざる所、古人この病無し。天眷皇統の間岭北に生じ、山野村坊頗るこの患に罹る。今に至り絶えず相伝染し、多く死亡を致す。状雷頭に似、腫咽頸に弘がり、内咽喉を攻めて堵塞し、水葉通じ難し。外側を攻め頭面牛の如し。眼耳穴盈ち、視聴ともに非なり、聞見を杜絶す。病悪しく命危し。

#### (六) 明代前期及び室町時代前期

中世を十五世紀までとしたので、一応その区切りで述べておく。

明初の医師楼英の撰になる『医学綱目<sup>(51)</sup>』は次のように「牛黄奪命散」の適応症の説明で、馬痺風という病名で喉頭ジフテリアについて述べている。

小兒肺腫れ、喘満し胸隔危急、両脇扇動し、陷下し坑<sup>な</sup>を作し、両鼻竅張り、悶乱嗽渴し、声嘎れて鳴らず、痰喘潮塞す、俗に馬脾風と云う、若し急ぎ療せざれば死旦夕にあり。

これは喉頭ジフテリアの特徴をよくとらえている。喉頭の狭窄が極度になると、ここに述べているように、一生懸命息を吸おうとしても空気が肺に入って行かないので胸郭は陥凹するのである。そして痰がつまりて完全閉塞して絶命することが多い。倭英はこれを「肺絶」といつている<sup>(52)</sup>。

次に十五世紀前半の熊宗立の『名方類証医書大全』<sup>(53)</sup>という著作がある。よく読まれた本で、わが国でも室町時代末期に堺で医書としては最初に出版されたものである。この本の咽喉部門の前置きとして次のような文章がある。

若し胸膈の間に熱毒を蘊積すれば風痰を生ずるに致り、壅滞して散ぜざれば発して咽喉の病と為る。喉内瘡を生じ或は状肉癰の如き腫と為り、痛を為し、窒塞して通ぜず、吐嚙下らず、甚しければ重舌を生じ出す。之を治するに、は尤も宜しく先ず風痰を去り、以て咽膈を通じ、然る後其の熱毒を解す。遅ければ則ちこの患を救わざることあり。非常に論理的な文章であり、主としてジフテリアのことを述べていると考えられる。そしてこの後に多くの処方方を列挙しているのであるが、その中でジフテリアを表わす病名としては、纏喉風、時氣纏喉風、喉痺、走馬咽痺等が使われている。

室町時代前期が明代前期と同時代である。先にわが国の鎌倉時代には既にジフテリアがあったのだろうということも述べたが、室町時代初期の『看聞日記』<sup>(54)</sup>には喉痺という病名で次のような記載がある。

応永廿五年（一四一八年）九月六日

禁裏（称光天皇）俄ニ喉痺御惱、以テノ外云々、面々仰天ス、然シテ御取り直シノ体云々<sup>テイ</sup>。

これは時の天皇が喉痺になったのであるが、まわりの人はこの病気の重大さを知ってあわてたのである。多分喉頭ジフテリアだったのだろうが、この時は回復したのである。

喉痺という病名は室町時代の『撮壤集』<sup>(55)</sup>という辞書にも載っており、この頃はこの病氣そのものがかなり一般的になっていたのではないかと思われる。

### 三 ま と め

- (一) 『ヒポクラテス全集』からジフテリアと思われる症例を二例摘出し、そのうちの一例には気管切開がされている可能性を示した。
- (二) 古代ローマ時代のアレタイオスがジフテリアに関して的確な記述を残していることを示した。
- (三) 古代中国の『素問』『靈樞』に「喉痺」「猛疽」「天疽」の名称でジフテリアと思われる記載があることを示し、それについて検討した。
- (四) 後漢の『傷寒論』の少陰病篇、厥陰病篇にもジフテリアと思われる記述のあることを指摘した。
- (五) 隋唐時代には『諸病源候論』『千金方』に「喉痺」「馬痺」等の名称で、具体的に多彩な記述があることを示した。これはわが国の平安時代の『医心方』にも引用されている。
- (六) 北宋の『和剂局方』南宋の『三因方』のジフテリアに関する記述を引用し、南宋では「纏喉風」という病名も現れていることを示した。
- (七) 鎌倉時代の『名月記』に喉頭ジフテリア及び咽頭ジフテリアの流行と思われる記載があることを示した。また鎌倉時代の医書『頓医抄』『万安方』の著者は実際にジフテリアを見ていたらしいことを示した。
- (八) 金元の時代には悪性ジフテリアの流行に際して「大頭天行病」「時疫疙瘩」等の名称で記載があり、またこれらの疾病の伝染性が意識されていたことを示した。
- (九) 明代前期にはまた独自の進歩した見方があることを示した。また同じ時代の日本の室町時代前期に「喉痺」の記載が

日記や辞書にあることを示した。

## 文献

- (1) 厚生省編『医制百年史、資料編』二五〇―二五二頁、ぎょうせい、東京、一九七六(昭和五十一年)
- (2) 富士川游『日本疾病史』平凡社、東京、一九七四(昭和四十九年)
- (3) 富士川游『日本医学史』七五五―七五六頁、形成社、東京、一九七四(昭和四十九年)
- (4) 山崎佐『日本疫史及防疫史』四六一―四九九頁、克誠堂書店、一九三一(昭和六年)
- (5) Haeser, H.: Lehrbuch der Geschichte der Medicin und der Volkskrankheiten. 484-486, 825-828, Friedrich Mauke, Jena, 1845.
- (6) Hirsch, A., translated by Creighton, C.: Handbook of Geographical and Historical Pathology, 2nd ed. Vol. 3. 45-115, The New Sydenham Society, 1886.
- (7) Behring, E.: Die Geschichte der Diphtherie, mit besondere Berücksichtigung der Immunitätslehre. Georg Thieme, Leipzig, 1893.
- (8) Bretonneau, P.: Offener Brief an die Herren und P. Guersant. 1855, in Behring: Die Geschichte der Diphtherie, 3-14, 前掲(7)文献
- (9) 今裕訳編『ヒポクラテス全集』六五二頁、名著刊行会、東京、一九七八(昭和五十三年)
- (10) 前掲(9)文献、七六五―七六六頁
- (11) 前掲(6)文献、四七頁
- (12) 前掲(8)文献、一二頁
- (13) Christie, A. B.: Diphtheria. 5. 164-168 in Oxford Textbook of Medicine, 2nd ed. vol. 1. Oxford University Press, Oxford, 1987.
- (14) Aretaens the Cappadocian: On Ulcerations about the Tonsils. 52 in Clending, L. (ed.), Source Book of Medical

History: Dover Publications, New York, 1960.

- (15) Artaeus the Cappadocian: Cure of Affections about the Columella (or Uvula). 53. in Clending, 前掲(14)文献
- (16) 前掲(3)文献、七五六頁
- (17) 吳崐『内經素問吳注』三八頁、山東科學技術出版社、濟南、一九八四年
- (18) 前掲(17)文献、一六〇頁
- (19) 前掲(17)文献、三六二頁
- (20) 前掲(17)文献、一七八頁
- (21) 前掲(17)文献、五二頁
- (22) 多紀元簡『素問識』痺論篇、二四二—二四三頁、聿修堂醫書選、人民衛生出版社、北京、一九八四年
- (23) 『靈樞經』卷三、五ウ、台灣中華書局、台北、一九八七年
- (24) 前掲(23)文献、卷十二、九〇—九ウ
- (25) 多紀元簡『靈樞識』癰疽篇、九二—九三頁、聿修堂醫書選、人民衛生出版社、北京、一九八四年
- (26) 朱佑武『宋本傷寒論校注』湖南科學技術出版社、長沙、一九八二年
- (27) 柯琴『傷寒論翼』一一九頁、傷寒來蘇集、上海科學技術出版社、上海、一九七八年
- (28) 前掲(26)文献、一五五—一七六頁
- (29) 前掲(26)文献、一三四—一五四頁
- (30) 前掲(6)文献、七四—七五頁
- (31) 南京中醫學院校校、巢元方『諸病源候論』上冊、傷寒病症候、二四四頁、人民衛生出版社、北京、一九八二年
- (32) 前掲(31)文献、下冊、小兒雜病症候、一三四—一三五頁
- (33) 前掲(31)文献、下冊、小兒雜病症候、一三四—一三四四頁
- (34) 孫思邈『備急千金要方』江戶醫學影北宋本、喉病、一二三—一二六頁、人民衛生出版社、北京、一九八七年
- (35) 丹波康賴撰『医心方』卷五、五十一—五十三才、新文豐出版公司、台北、一九七六年

- (36) 前掲(35)文獻、卷五、五十三才
- (37) 『太平惠民和劑局方』治咽喉口齒、二五七—二六三頁、人民衛生出版社、北京、一九八五年
- (38) 梶原性全『万安方』咽喉門、八二五頁、科學書院、東京、一九八六(昭和六十一年)
- (39) 梶原性全『頓医抄』咽喉諸病、三六一頁、科學書院、東京、一九八六(昭和六十一年)
- (40) 前掲(38)文獻、八二五頁
- (41) 陳言『三因極一病源論』咽喉病証治、二二七—二二八頁、燎原書店、一九七八(昭和五十三年)
- (42) 前掲(39)文獻、三五九—三六〇頁
- (43) 前掲(38)文獻、八二六頁
- (44) 藤原定家『明月記』第三、二六四—二六五頁、國書刊行會、東京、一九八〇(昭和五十五年)
- (45) 前掲(44)文獻、四二—四六頁
- (46) 李杲『東垣試効方』卷九、雜方門、四三七頁、上海科學技術出版社、上海、一九八四年
- (47) 羅天益『衛生寶鑑』卷九、一二四頁、人民衛生出版社、北京、一九八七年
- (48) 前掲(47)文獻、卷十一、一四三頁
- (49) 前掲(47)文獻、卷三、二一—二二頁
- (50) 多紀元簡『傷寒広要』時毒大頭病、二〇一頁、聿修堂醫書選、人民衛生出版社、北京、一九八三年
- (51) 多紀元簡『救急選方』小兒急証門、四七頁、聿修堂醫書選、人民衛生出版社、北京、一九八三年
- (52) 前掲(51)文獻、急喉痺門、三五頁
- (53) 熊宗立『名方類証醫書大全』卷十八、咽喉、一五五頁、上海科學技術出版社、上海、一九八八年
- (54) 神宮司庁編『古事類苑』方技部、一一七八頁、吉川弘文館、東京、一九七七(昭和五十二年)
- (55) 前掲(54)文獻、一一七八頁

(七沢リハビリテーション病院)



# A Historical Survey of Diphtheria in Europe, China and Japan

## Part I: Ancient and Medieval Age

by Akira NAKAMURA

The history of diphtheria has not yet been fully studied.

The author presents two cases of diphtheria from the Hippocratic collection. It is presumed that a tracheotomy was performed in one of them.

The author presents the ancient Chinese names of diphtheria, Houbi (Kōhi, 喉痺) which means “laryngeal obstruction”, Mengju (Mōso, 猛疽) which means “fulminant carbuncle” and Yaoju (Yōso, 夭疽) which means “children-killing carbuncle”, from Chinese medical classics, and suggests that Shaoyinbing (Shōinbyō, 少陰病), which means “small negative disease”, in Shanghanlun (Shōkanron, 傷寒論) is possible to be diphtheria.

In the Medieval Age (6-15c.), so many records and commentaries are found in Chinese medical books, which describe diphtheria by many different names, such as Mabi (Bahi, 馬痺), Chanhoufeng (Tenkōfū, 纏喉風), Datoubing (Daitōbyō, 大頭病) and so on. Mabi means fulminant diphtheria. Chanhoufeng means strangling disease, which coincides with the old Spanish name of diphtheria “Garrotillo.” Datoubing means “big head disease” which represents the swelling of face and neck in malignant diphtheria, and which coincides with the English vulgar name “Bull-neck.”

Japan also has some descriptions about diphtheria in medical books and chronicles of the Kamakura-

Muromachi Age (13-15c.), which use the words Houbi (Kōhi, 喉痺), Houzhong (Kōshu, 喉腫) etc. for diphtheria.